

カンパニーデラシネラ×

リー・レンシン(マレーシア)、リウ・ジュイチュー(台湾)

『TOGE』第2回報告書〈稽古〉

高橋彩子

1. 作品名&コンセプト決定

かねてからの構想をもとに10月、プロットが決定。作品のモチーフとなる『動物農場』では支配する人間を追い出した動物たちが自由で平等な自治を試みるも、次第に不均衡が生じ、支配者や外界からの攻撃にさらされる物語だが、本作では“支配者側”を抽象化し、自分の置かれている状況に気づかない人々の姿を描く。中心となる登場人物たちは女性5名で演じ、小野寺修二はサポート的な立場に回ることに。作品名は『TOGE』に決定。

2. 稽古@KAAT スタート

12月の本番を控え、11月半ば、本番の会場であるKAAT神奈川芸術劇場での稽古がスタート。これ以前は、特に海外組とは、稽古場での対面でのクリエイションを重視し、メールでの文面や映像でのやりとりはあったものの、Zoomなどでの稽古は特に行わなかった。

10月上旬、たたき台となる今回のテキスト(台本)を仕上げ、英訳し、出演者に共有。

10月21日、演出家と出演者で顔合わせZoomミーティングをに行い、テキストについての感想や原作についての話をする。

11月16日、KAAT8階アトリエにて稽古開始。既に日本にいる小野寺修二、藤田桃子、崎山莉奈の稽古初日となる。隔離期間中のリー・レンシン、リウ・ジュイチュー、梶原暁子は自身のソロなどのアイデアを練ったり、Zoomでやりとりをしたりしながら過ごす。

11月18日、レンシンが稽古に合流。

11月19日、梶原が稽古に合流。

11月23日、ジュイチューが稽古に合流。

全員が揃った11月24日の稽古場を見学。物語の初めの方、「飼われている」登場人物たちが相互監視する場面を、長いゴムを使って表現。あやとりのように、様々な形が作られていく。全員がゴムを持ち、その中に入ると、まるで船のよう。5人で一つのゴムを扱うだけに、タイミングが違くと、ゴムがゆるんでしまったり、違う行為に見えてしまったりするので、なかなか難しそうだ。「急に走り出さずちょっと傾く」など小野寺からの指示は極めて細かい。

例えば、レンシンが船から落ちそうになるのを藤田が助けたかと思えば、藤田が船の外へ出る場面。「あ！」とレンシンが追うような仕草をするところで、横の梶原も同じリアクションをしたところ、小野寺から「動きが一面的になる」と指摘が入り、梶原は後ろによろける崎山を、ジュイチューと共に引っ張る動きをするようになった。



長いゴムを使って、不安定に揺れ動く人々を表現 (撮影:筆者)

このように、細部を丁寧に作りながら、何度も同じ場面を繰り返すうち、動きやニュアンスが、より豊かに、よりスムーズになっていく。その一方で、小野寺は「細かい物語というより、それぞれの個性、存在感を見せたい」とも語る。

続いて稽古は、梶原がアジテーションし、その演説によって、飼いならされた人々に変化が生じる場面。「ダンスではなくディスカッションに」という小野寺の注意が面白い。

ここでは、梶原やジュイチューが斜めの台に体重を預けるため、その耐久性について、舞台監督の岩谷ちなつも交えて検証も行われた。



舞台監督の岩谷と共に耐久性を検証(撮影:筆者)

小野寺は美術家マーク・マンダースにインスパイアされたそうだが、彫刻などがシンプルな椅子やテーブル、台などと共に不思議な均衡で存在するその世界は、デラシネラの世界と合いそうだ。

稽古場での会話には日本語と英語が混じり合い、レンシンとジュイチューが中国語で補い合うことも。混乱はなく、和やかな雰囲気だった。

なお、この日はKAATの劇場公演のための稽古だったが、別日にはアトリウム空間で使用する巨大なビニール袋の実験も実施。こちらの準備も進んでいる。



アトリウム公演のための巨大なビニール袋。この内外でパフォーマンスを行う